

〈書評論文〉

欲望のレジーム

—— 東京における若いゲイ男性、メディア、男性性 ——

Thomas Baudinette,
*Regimes of Desire:
 Young Gay Men, Media, and Masculinity in Tokyo*
 (University of Michigan Press, 2021)

林 正 浩

1 はじめに

新宿二丁目（以下、二丁目と記す）は世界的に有名なゲイ・タウンで、そこには多様な人たちが集まり、豊かな人間関係のネットワークや多彩なカルチャーが形成され、圧迫のないクィアな世界が目指される。「主流」のセクシュアリティから「逸脱」した人々にとっては、二丁目はまさに異性愛中心主義社会における貴重なオアシスであるといえよう。二丁目に対するこうした肯定的な評価は学術研究においてもなされており、たとえば砂川（2015）では、二丁目をただの性的空間と乱暴に表象してしまう主流社会のメディアが批判され、二丁目におけるイベントや人間関係の意義が高く評価され、二丁目は自己意識を高めてくれる、強い共同体意識や所属感が共有されるコミュニティだと説かれている。

しかし、二丁目は果たしてこうした評価のとおり性的マイノリティのオアシスなのだろうか。本稿で扱うマッコーリー大学の文化人類学者 Thomas Baudinette による著作は、ゲイ男性に注目し、彼らの欲望を形作る「欲望のレジーム」を考察し、二丁目における差別や排除が軽視され、その文化がしばしばポジティブに評価されている現状に疑問を投げかける。

著者は日本におけるクィアな流行文化の国際的な伝播と、それを受容・消費する地域に

におけるジェンダー・セクシュアリティの概念形成への影響に問題関心を持っている。本書は、著者が東京でのフィールドワークをもとに、ヘテロノーマティヴィティ（異性愛規範）や男性性などの概念を用いて、「欲望のレジーム」によって育まれる日本のゲイ・カルチャーを批判的に捉え直すものである。

本書は序論と結論を含め、全8章で構成されている。序論では、研究が始められた経緯ならびに本書の問題関心と目的が説明され、次に先行研究の検討を交えながら本書の背景と主要な議論が紹介される。第一章では、二丁目のエスノグラフィーを記しつつ、二丁目という言葉空間がヘテロノーマティヴィティに基づく認識をいかに広め、日本におけるゲイ男性向けのメディア（以下、ゲイ・メディアと記す）の生態を構築するのかが分析される。第二章では、キー・インフォーマントである4名の若いゲイ男性⁽¹⁾の「心理伝記(psychobiography)」が綿密に記述され、ゲイ・メディアが若いゲイ男性のジェンダーとセクシュアリティの概念形成に及ぼした影響が検討される。第三章では、二丁目で低く価値づけられる男性性と高く価値づけられる男性性が明かされる。残りの三章では複数のゲイ・メディアの分析がなされる。第四章では、GV（ゲイ男性向けのアダルトビデオ）がゲイ男性に与える影響が検討される。第五章ではゲイ雑誌、そして第六章ではオンライン出会いサービスの影響が検討される。最後に著者は結論で、日本のゲイ・カルチャーを強く規定する「欲望のレジーム」に関する発見を整理し、さらにそれを動揺させる希望があることも見いだそうとする。

以下、まず第2節で本書の概要を3つの部分——第一章から第三章、第四章から第六章、結論——に分けて紹介する。第3節では本書の意義と限界を検討し、さらに評者の関心に照らし、「欲望のレジーム」が持つさらなる可能性について論じていく。なお、本書からの引用部についてはページ数のみを表記している。

2 「欲望のレジーム」に服従するゲイ男性たち

2-1 新宿二丁目とその文化に対する批判的再考

第1節で述べたように、本書では二丁目とその文化が批判的に再考され、とりわけ第一章から第三章においてその批判意識が際立つ。

著者がまず注目するのは、「タイプ」という欲望を細分化させるシステムである。タイ

⁽¹⁾ 著者が最初にフィールドワークを行った時（2013年）には、20歳1名、21歳1名、24歳2名の計4名のキー・インフォーマントがいた。

プというのは、本来ならば、我々が日常生活で経験しているように、欲望の対象や自らのアイデンティティを表す時に使う一連の言葉や概念である。しかし二丁目における「タイプ」は、我々が日常生活において使用する、「優しい人」といった具体的な言葉ではなく、カテゴリー化された「〇〇系」と「〇〇専」のみによって構成された言葉の体系である。「〇〇系」は自分のアイデンティティを描述する時に使用され、一方で「〇〇専」は欲望の対象を表す時に使用される⁽²⁾。この「タイプ」は非常に重要である。ゲイ男性は「タイプ」を習得してアイデンティティと欲望を言語化し、二丁目における様々なビジネスも、この「タイプ」の上に成り立っている⁽³⁾。ところが、実はこの「タイプ」には陥穽が埋め込まれている。第一に、自己を言い表す「〇〇系」と他者が使用する「〇〇専」とをうまく噛み合わせるためには、頻繁に二丁目に通い、その文化を受容し、そこで多くの時間や金を消費しなければならない。第二に、様々な「タイプ」は平等ではなく、中心と周縁が存在する。第三に、「タイプ」という語彙は当事者が自らセクシュアリティを認識しようとする主体性を制限してしまう。

著者は「タイプ」というシステムを検討することで、二丁目に伝わる、そして先行研究において肯定される「二丁目に捨てるゴミなし」⁽⁴⁾という神話を問題視する。たしかに二丁目では、主流社会で異常視されるゲイ男性の欲望が肯定され、孤立するゲイ男性の間に連帯が築かれるが、そこはけっして誰もが肯定され、満足するクィアなユートピアではなく、ホモノーマティヴ（同性愛規範的）な男性性の代表である「イカニモ系」（見るからにゲイらしい人という意味である）が支配する世界だと著者は指摘する。

次に著者が注目するのは、そのホモノーマティヴな男性性である。ホモノーマティヴな男性性はヘテロノーマティヴ（異性愛規範的）な男性性からなる。

これはすでに先行研究で指摘されたことだが、ゲイ男性は男らしさを好み、女らしさを拒絶する傾向にある。二丁目ではその傾向がより強い。そこではハードな男性性が追求されるのに対し、ソフトな男性性が拒絶される。著者の仕事は、それぞれの男性性の具体的な意味と、そうした構造の原因を探ることである。著者がいうには、ハードさを備える「イカニモ系」は二丁目においてもっとも特権的「タイプ」であり、ホモノーマティヴィティ（同性愛規範）として機能する。というのは、彼らがジムで鍛え上げた筋肉質の体は、外見上のハードさを有しているだけでなく、その身体の持ち主の内面もまたハードだと見なされ

⁽²⁾ たとえば、「前髪系」は自身が前髪を有している状態をさし、「老け専」は中高年の相手を好むという意味である。

⁽³⁾ ゲイ・バーは差別化を図るために、それぞれに異なる「タイプ」の客層が設定される。ゲイ・ショップにおける商品も、「タイプ」ごとに配列されることが多い。

⁽⁴⁾ 新宿二丁目ですら誰も排除されことなく自分の居場所が見つけれられるという意味である。

るからである⁽⁵⁾。著者がフィールドワークで出会った人のなかに、「イカニモ系」の身体に強烈な憧れを抱き、彼らに追隨して身体改造に踏み出す当事者もいる。その一方、ゲイ男性が問題視するのは、女らしさと可愛さである。この可愛さは両義性を持つ。二丁目では「カワイイ系」向けのバーや可愛さを極める当事者が存在するのは事実だが、ハードな「イカニモ系」と対比する時、可愛さはそのソフトさと女性性の連想されやすさがゆえに問題視され、周縁化される。そうした「女らしい男性」が問題視される現象は、ヘテロノーマティブなイデオロギー——ヘゲモニックな男性性がもっとも望ましいとされ、それに背くほかのジェンダー・パフォーマンスは周縁化される——に由来するものと著者は説く。

興味深いことに、かつてヘテロノーマティヴィティを忠実に遵守していた主流社会は、逆に二丁目と対照をなすような動きを見せている。ジャニーズに代表されるソフトなアイドルや俳優が高い人気を誇り、男同士の恋愛を繊細に描く BL と呼ばれるジャンルの作品も、ポピュラー文化となって数多くの女性ファンを魅了する。しかし、一部の若いゲイ男性はそうした動向が思わしくないと考え、「二丁目こそがこの社会における真の男らしさを守護する最後の砦だ。なにせこの社会は、去勢された可愛い男を欲する若い女たちの欲望に呪われた」という (113)。ハードな男性性のファンタジーに夢中になる若いゲイ男性の姿がここで浮かび上がる。

2-2 ゲイ・メディアがもたらしたもの

本書の第三章から第六章は、二丁目で広く活用され、ゲイ男性の生活と切り離せない GV、ゲイ雑誌、オンライン出会いサービスという 3 つのゲイ・メディアが、若いゲイ男性に与える影響を検討する。

著者の目をまず引くのは GV である。身体的特徴とジェンダー・パフォーマンスに基づき、GV は「タイプ」によって分類される。それは欲望の序列化を意味する。数多くのジャンルの中で中心を占めるのは、ヘテロノーマティブな男性性を表現する「体育会系」であり、ゲイ男性の性幻想を膨らませる。ゲイ・ショップにおける GV の配置からもそのことが伺える。「体育会系」に関するビデオは数がもっとも多く、店のもっとも目立つところに置かれる。それは、ゲイ男性に欲望の優劣を教えるのと同然であるといえる。

GV における「体育会系」は往々にして、タフで雄々しい、そしてヘテロセクシュアルな男性たちである。そうした男性が受動的に性交させられる表象は、それを消費するゲイ

⁽⁵⁾ 著者の聞き取り調査では、多くのゲイ男性は、ジムで筋肉トレーニングをする人を規律正しい、真面目である、または努力家だと評価していた (95)。

男性に能動性を賦与し、これまで男性失格とされ、一方的に客体化されてきたゲイが、優位に立つヘテロセクシュアルな男性およびそうした権力構造に挑戦する可能性を与える。しかし、GV がゲイ男性をエンパワーする力は限定的だと著者は警告する。というのは、そのエンパワーメントを得るには、まず GV を消費する必要がある、そして GV に現れる一連のヘテロノーマティヴな認識を受け入れなくてはならないからである。

続いて、著者はゲイ雑誌『バディ』を取り上げる。GV では身体的特徴に基づく「タイプ」がジャンル分けの機能を果たすのに対し、ゲイ雑誌では「タイプ」をアイデンティティやライフスタイルに読み替えて使用する。『バディ』が強く推しているのは「イカニモ系」のライフスタイルである。雑誌内で掲載されたおしゃれなクラブのパーティーに出向いたり、体型や言動で男らしさを磨いたりするなど、そうした「イカニモ系」的な生き方でしか、ハッピーなゲイライフは実現しえないという信念を読者に伝道する。ほかのファッション誌と同じように、『バディ』も読者を規律正しい身体改造と特定のグッズやサービスの消費へと誘導しているのである。『バディ』が作り出したのは、消費主義に基づくホモノーマティヴな文化である。

著者が最後に取り上げるのは、ゲイ男性向けのオンライン出会いサービスである。そこでは、「タイプ」は理想的な自己を演出する際に戦略的に使われる。なぜなら、オンライン出会いサービスの使用は実質、市場競争の論理に基づき、「タイプ」とする相手に自分を売り込む行為だからである。多くのゲイ男性は、理想とするパートナーを惹きつけるために、「ノンケっぽさ」⁽⁶⁾やハードな男性性を演出する。オンライン出会いサービスは、ゲイ男性が欲望やアイデンティティをありのままに表現する場所ではなく、ハードな男性性を高く価値づける空間である。そして、そのような認識はインターネットの力を借りてさらに日本中のゲイ男性たちに浸透していく。結果として、著者のインフォーマントの多くは不安や焦燥感を覚える。彼らは、望ましいとされる欲望の「タイプ」とその人らしさを象徴するアイデンティティの間で迷走し、彷徨う。

2-3 「LGBT ブーム」に現れた希望の光

以上を証拠に、著者は日本における「欲望のレジーム」の存在を確認した。それは、「タイプ」というシステムを通して、ヘテロノーマティヴな男性性を望ましい欲望として特権化する。そうすることで、過去にあったハードな男性性のファンタジーへの想像・復権⁽⁷⁾

⁽⁶⁾「ノンケ」とは異性愛男性のことである。異性愛男性を特徴的に演じることで、ゲイ男性は「ノンケっぽさ」を演出する。

⁽⁷⁾ 著者がゲイ雑誌の表象と三島由紀夫の考え方を例にあげた。ゲイ雑誌『さぶ』では、侍の表象や

が度々実践され、日本におけるセクシュアリティの認識を支配する、ヘテロシステム⁽⁸⁾に挑戦するほかのジェンダー・パフォーマンスの力を弱体化させるという目的が達成される。

しかし、2015年に著者が再び日本の土地を踏んだ時には、彼の目に映る状況は変わり始めていた。米連邦最高裁は、同性婚は合衆国憲法の下での権利だと解釈し、同性婚は全米で合法になった。これを受けて、日本の各メディアでは「LGBT ブーム」が起こった。「LGBT ブーム」という文脈の下、キー・インフォーマントのうちの3人は、これまで二丁目やゲイ・メディアで遭遇した、ホモノーマティヴな言説や経験に疑問を投げかける力を感じたという。著者は、「LGBT ブーム」で前景化する若いゲイ男性によるそうした疑問が、ヘテロノーマティヴな「欲望のレジーム」を動揺させる鍵だとみなす。

3 「欲望のレジーム」を超えようとする——むすびにかえて

本書では日本における若いゲイ男性の欲望を形作る「欲望のレジーム」が検討され、それを支えるヘテロノーマティヴィティが批判された。よって本書は、当事者に自らの欲望やアイデンティティの再考を迫り、「欲望のレジーム」の支配・圧迫からの解放を促す効果があるといえよう。ただ、本書の意義は、単にヘテロシステムの加害者性を指摘することや同性愛者の解放を促すことにとどまらず、私的なものとみなされがちな欲望とヘテロシステムとの緊密な関係——ヘテロシステムが若いゲイ男性の認識を支配し、ヘテロノーマティヴィティの論理に基づき、ホモノーマティヴィティが作り出され、若いゲイ男性たちを序列化し、無力化させる——を示したこともある。こうすることで、著者による二丁目とその文化に対する批判も当事者差別につながりにくくなる。また、著者の新自由主義に対する疑い深さがさらに本書を昇華させる。一見誰もが平等で自由に幸福を掴む機会が与えられた新自由主義は、実は牢籠だらけである。二丁目がその典型例である。そこには、同性愛者をエンパワーする働きがあると同時に、商品化された情報、サービスと欲望が当事者たちに「捨てるゴミなし」という一炊の夢を見させ、序列化された世界や盲目の消費へと誘う。

一方、本書はいくつかの問題点をも抱えている。第一に、著者が検討する「欲望のレジーム」

武士道精神が理想化して語られている。また、三島由紀夫が戦後の日本を復興するためには、ハードで帝国軍のような男性性に戻るべきだと提唱したこともある（105）。歴史的な論考については本書の第三章を参照されたい。

（8）伏見憲明による造語。ヘテロシステムでは暗黙の了解として、ヘテロセクシュアル、またはスジェンダーの男性のみが日本国民とみなされ、ゲイ男性が文化上の日本人の範疇から排除される（8）。

ム」は明確な定義をもたない点である。「欲望のレジーム」はゲイ・メディアをさすのか、若いゲイ男性の欲望を構築するヘテロノーマティヴィティの論理をさすのか、もしくはヘテロシステムがゲイ男性の欲望に影響を及ぼす経路をさすのか、全く読者の理解に委ねられている。概念の曖昧さゆえに、我々読者は本書における議論の射程に留意しなければならない。本書が考察したのは、二丁目で広く流通するメディアと、二丁目に通う当事者の経験である。それらはいわば、ロマンスとエロスに特化した内容であり、当事者の欲望の全てではない。当事者の間にはそれ以上の複雑な関係と欲望が存在していることを忘れてはいけない。

第二に、先述したように、本書の最大の新規性は、若いゲイ男性の欲望とヘテロシステムとの関連を主張することにあると思われるが、ゲイ男性の欲望とヘテロシステムとの関係を完全に解きほぐしたとはいいがたい。というのも、我々が経験するように、ヘテロシステムにおける価値観や規範もまた変化し続けるからである。たとえば、第2節第1項で述べたように、ゲイ男性の価値観と主流社会の動向は相反しているように見える。主流社会ではジェンダー規範にとらわれない動きが多く見られるのに対し、二丁目ではかつての男らしさを復古しようとする。本書を通して例証されたヘテロシステムとゲイ男性の関係性は妥当であるが、それが成立する条件や範囲を検討すべきだと評者は考える。

第三に、本書ではせっかく4名のインフォーマントの「心理伝記」が仔細に書き記されたのにもかかわらず、ゲイ・メディアに影響され、「欲望のレジーム」に翻弄される当事者像が目立ってしまう。これは評者の感覚ではなく、著者は実際に「構造→主体」という単方向の図式で分析している。

社会記号システムとしての「タイプ」は、若いゲイ男性たちの、欲望とアイデンティティを自ら検討する主体性（agency）を制限した。……そのような、「タイプ」を使って欲望を表す空間に社会化してしまったから、自らの欲望を認識するのに、日本の若いゲイ男性たちは「タイプ」を使わずにはいられなくなった。（208）

そうした図式の下では、自然と当事者の主体性が見落とされるだけではなく、「欲望のレジーム」に合致しないほかのジェンダー・パフォーマンスも軽視されてしまう。たとえば、一般的に二丁目で活躍するとされるドラッグ・クイーン⁽⁹⁾について、著者は「異性装男

⁽⁹⁾ 女装でパフォーマンスを行う人たち。外見や言動において、男性が理想像として求める女性性を過剰に演出する。

性パフォーマーたちがいるオカマバーは二丁目の周辺に位置する。……その多くはヘテロセクシュアルな観光客をターゲットとしている」(60)と述べたくらいで、そうした実践が「欲望のレジーム」といかに相互作用をするのか、より詳細な説明が必要とされる。

以下では、評者による個人的な期待も込めて、「欲望のレジーム」のさらなる可能性について論じる。

第一には、「欲望のレジーム」をほかの社会に応用する可能性である。著者自身も述べているように、「ヘテロノーマティブな男性性への欲望を蘇らせる点において、日本のゲイ・カルチャーは別に独特ではない……いわゆる先進国において、ヘテロノーマティブな男性性を高く価値づけることはありふれている」(5)。ほかの社会で「欲望のレジーム」はどのような形で現れてくるのか、興味深い。

第二には、当事者による「欲望のレジーム」を作り変える実践の可能性である。本書では「欲望のレジーム」に服従する(せざるをえない)ゲイ男性たちの姿が鮮明に浮かび上がった。一方、少数だが、インタビューの中には「欲望のレジーム」に依拠して自分の欲望を表現しながらも、それに不服を唱える者もいる。いわば「欲望のレジーム」のなかで生き、さらにそれを超えようとする者たちだ。今後はそうした当事者による「欲望のレジーム」に対抗する(もしくはそれを作り変える)実践に注目する必要がある。著者は「LGBT ブーム」に期待を寄せたが、「LGBT ブーム」はいずれ去るだろう。それが去った時に、当事者による日々の主体的な営為こそが「欲望のレジーム」に変革をもたらす鍵ではないだろうか。

参考文献

砂川秀樹, 2015, 『新宿二丁目の文化人類学——ゲイ・コミュニティから都市をまなぐ』 太郎次郎社。

(りん じえんがお・博士後期課程)